

修士論文要旨（平成27年度）

平成27年度に提出された修士論文は、文学研究科国文学専攻1編、同研究科文化財史科学専攻15編、同研究科地理学専攻1編、社会学研究科社会学専攻（臨床心理学コース）5編の、合わせて22編である。

各論文の要旨を次に掲載する。

文学研究科 文化財史料学専攻

《修士論文要旨》

文化財建造物における漆喰の保存と修復

菊 地 智 慧*

現在、国が指定する文化財建造物や重要伝統的建造物群保存地区などの件数が年々増えており、その多くに漆喰が使用されている。漆喰は、古くから活用されており、高松塚古墳をはじめとする壁画下地、城郭をはじめ寺社や民家、蔵など多くの建造物に用いられてきた。現在でも、当時の建築技術の象徴として歴史的景観を構成する要素の一つとなっており、また土蔵などは、優れた保存性から民俗資料、古文書などの文化財の収蔵や展示施設として使用されている場合もあり、文化財を保存する上でも重要な役割を担っているため、保存・修復の必要性が増している。

また、現在、全国では歴史的な景観を持つ地域の文化財指定登録件数が年々増えていることから、その景観を構成する建造物の多くに漆喰が使用されている。中には、「白壁の町並み」として観光の目玉としている地域もあるため、漆喰は伝統的な建造物や歴史的なまちなみ景観に歴史を感じさせる視覚的な役割を持つと考えられる。

第1章 日本における漆喰

日本の漆喰といえば、消石灰に苧を混ぜ、海藻糊を入れて練ったものをさす。日本における漆喰塗りの基本的な工法は全国共通であるが、その地域の気候や風土により、苧や糊などの補助剤の有無や壁の厚さなどが変わってくるなど多様化している。そして、これらの多様化が生じた要因は、日本建築の長い歴史のなかで培われたものである。

第2章 現在の左官業

漆喰塗において欠かせないのが左官職人である。左官は漆喰だけでなく、土壁や塀なども施工でき、現在でも数が減少しつつあるが、多くの職人が活躍している。

しかし、左官業を支える消石灰や糊剤の需給実態は減少しており、特に貝灰の製造の減少が顕著である。貝灰は塗る際にも柔らかく扱いも容易とされており、主に城郭や蔵など文化財建造物の多くには貝灰を好んで用いられていることが多い。貝灰のストック量などは明らかになっていないが、近い将来、貝灰による漆喰塗が施工できなくなる可能性も危惧される。

第3章 文化財建造物における漆喰の修復

文化財建造物は、外観のみではなく建築様式、構造、意匠など当時の技術を後世に残すことが好ましいとされ、修復や復元の際には綿密な構造調査、過去の記録や発掘調査を必要とする。日本の歴史的な建造物の多くの壁には漆喰が使用されており、美しい見栄えはもちろんのこと、建

平成27年度 *文学研究科文化財史料学専攻

物の調温調湿、構造強化の役割も果たしている。漆喰壁の修復は、事業者と左官職人が話し合いその土地に合った工法で施工されるが、多くが現代の材料や塗り方で塗られており、当時の技術をそのまま残すことが難しく、課題でもある。

第4章 伝統的建造物群保存地区における取り組み

近年、伝統的建造物群保存地区では、地区内の建物の修復の際に補助金制度が確立し、建造物の保存は行政だけでなく、その地区の住民や所有者が主体となって行っているが、建物を維持管理する所有者の負担など多くの問題が存在する。本研究では、埼玉県川越市、奈良県奈良市今井町、岐阜県高山市・三町、京都府京都市のまちなみ保存と建造物の修理について調査を行った。その結果、伝統的なまちなみにおいて、漆喰外壁の需要は地域によって差はあるが、壁面の修復・復元で新たに漆喰を推奨する地区も増えてきており、地域ぐるみのまちなみ保存が推進されていることが分かった。

5章 まとめ

近年では、現代人の漆喰離れ、貝灰などの漆喰材料などの生産減少、若手の左官職人の減少など、左官業の存続が危ぶまれる問題が多く残っている。また、漆喰そのものの劣化に関しても、気候や立地条件も関係するが、壁内の水分率の変動、紫外線や大気汚染による劣化など解明されていない問題も多くあるため、今後とも科学的な解明が必要である。

《修士論文要旨》

災害を見据えた文化財、防災の教育と教材化について

桂 大 介*

第1章 はじめに

ここ30年以内に高確率で起こるとされている東南海・南海地震では大きな被害が予想される。この災害から人々や文化財を守るためには、教育が大きな力になる。しかし、現状として文化財教育は全国を通して余り行われていない。防災教育は行われてはいるが、各地での差が非常に大きいものとなっている。

第2章 研究の必要性

まず文化財教育と災害教育が必要であるか述べる。災害において人命が最優先である。そこで文化財レスキューへの理解がされず、批判や抗議それを避けるための延期などが実際に起こっている。その中で、迅速に活動を行える組織があっても良いと私は考える。加えて、文化財レスキューを含めた復興活動では数が大切となる場合も多く、市民の協力が必要である。これらを可能にする為には教育の効果が大きいのである。

防災教育では2011年に起こった東日本大震災の例を見てみると、津波の知識があれば避けられた事例や学校における教育や日頃の準備で被害の違いが出た例が見て取れた。そこから考えると防災教育の効果と必要性が見えてくる。

第3章 文化財教育・防災教育の研究

文化財教育では実際に指導案の作成を行った。想定学年は中学生とし、時間数は3～4単元、「日本の文化財」「地域の文化財」「世界と日本の文化財」を題材として作成した。内容として「日本の文化財」は、実例を見ながら文化財の多様性を知る授業。次に「地域の文化財」を通して自分の住む地域の文化財、歴史について知る授業。最後に「世界と日本の文化財」の中で、世界と日本の価値観の違いや世界遺産条約成立の経緯から文化財の保護についてみる授業となっている。そして、グループワークとして「地元観光案内」という事で調べ学習の時間を取り入れた。

次に防災教育では、文化財教育とは異なり指導案の作成は行わず現在行われている教育からの検討と考察を行った。

時間だけでは決められないが、1時間程度のものから40時間以上のものであり地域差が多いことを改めて知ることとなった。内容では、力を入れている地域であっても内容がそこまで変わるわけではなかった。しかし、少し変わったものや深い内容を行うには、他機関との連携が必要であり、他との連携の大切さを知る事となった。また、ただ教えるだけでは効果が少なく、いか

に生徒が災害を身近に感じてもらえるかという観点が必要で、そのためには時間の確保も大きな課題となる。

最後に、学生以外にどのような手法で教育を行っていくかであるが、文化財や災害に興味のある人は宣伝や既存の内容の充実化を図れば自ずと訪れてくれるであろう。しかし、興味のない人はたとえ良いモノを作っても訪れてはくれない。さらに学校のように強制的に学ばせる事が出来ない。そこで、どの様にそれらを知ってもらうかという観点で方法を考えた。その方法は、CMを使用した方法で、テレビではコスト面で非常に高価であるため、組織など大きなものが必要になる。そこで手軽に行えるインターネットCMを活用した方法を提示した。

第4章 まとめ

今回作成した指導案から教材を作る注意点として、短期間での授業の場合いかに知識を覚えさせる場をいかに減らすことが出来るのか。初めての生徒もいる事を考え、イメージを上げる問いを作成し、イメージの共有化を行う。文化財の楽しみは現物を見る事であるため、文化財をいかに多く紹介するかを考えて作成する。

文化財教育では時間があまり取れない状況であり、防災教育では時間が多すぎて困る事はない。しかし、多く時間を取れる現状が学校教育では無い。その中で、方法として科目教科に絡ませる方法を提案した。注意点として、様々な教科領域に及ぶため学校全体での協力と多くの時間がかかる。

これらの事を考えると、専門の教員を学校に各自配置する事が必要となるが、それにも時間がかかる。そこで、公立学校全てが加入し、私立学校や防災専門機関も積極的に加入したネットワークが必要である。しかし、その規模になると国などの力が必要となるが、本来防災教育は国全体で取り組む事項であると考えるので問題はない。そこで、早くこのようなネットワークを作るべきである。

ここまで、色々述べたがこれらの教育において取るべきは、まず総合的な学習の時間をうまく活用するために専門の人を置くか、廃止し、別の時間に充てるといったことから始めるべきである。

そして、子供も教育は日々変化し続けているため、それに合わせた内容を作っていかなければならない。

《修士論文要旨》

古代尾張産須恵器の流通に関する研究

－平城京を中心に－

加 藤 江 莉*

須恵器の研究はこれまでに多くの先行研究がなされてきた。生産地と消費地の関係性は重要であるが、こうした視点での研究はあまり行われてこなかったのが現状である。しかし、近年消費地から出土した須恵器の生産地に着目する研究が進んでいる。生産から流通、消費といった一連の流れを捉えながら、生産体制や須恵器の流通についての実態が明らかになりつつある。

古代の一大消費地である平城京からは多くの地域から須恵器が運びこまれている。その中には尾張国で生産された須恵器も含まれていることが明らかとなっている。須恵器の産地を追求することは、古代の焼物の流通形態を具体的に検討するために必要な作業であり、地方窯で生産された須恵器の在り方を考えるためのスタートラインである。

本稿では、2つの視点から考察を行った。①生産地である猿投窯と尾北窯の特質について、②平城京に運ばれた尾張産須恵器の流通についての2点である。

(i) 猿投窯と尾北窯の特質について

両窯の特質の把握に努めるために猿投窯では^(註)NN-288号窯を対象とし、尾北窯からは高蔵寺2号窯と篠岡112号窯を対象とした。猿投窯編年でいう高蔵寺2号窯式期に該当する8世紀前半の器種構成や法量分化に注目して、検討を行った。

分析をおこなった結果、両者とも形態や技法の面からみると共通している点が多々みられたが、一部相違点も幾つかみつけた。共通点としては、両窯共に杯B蓋の口縁部にかえりの持つ蓋がみられなくなる点や、成形・製作技法等は大差が無かった。しかし、大型供膳具や金属器模倣品などの特殊品については尾北窯のほうが、出土事例が多い。こうした点については、尾北窯の特質として捉えている。高蔵寺2号窯における豊富な器種分化や金属器模倣品などの特殊な要素については、尾北窯・猿投窯においても際立って特殊な生産を行っていることが明らかとなった。

(ii) 平城京における尾張産須恵器の流通について

流通については、平城京出土の尾張産須恵器を対象とした。対象資料の中には、原始灰釉陶器も含めているが、硯などの文房具は対象に含めていない。対象とする年代は、奈良時代に焦点を当て、概ね8世紀から9世紀初頭までを対象年代とした。

新出資料や実見したものを中心に、尾張産須恵器の集成を行った。平城宮からは15地点107点、平城京からは44地点111点、平城京内における寺院からは8地点26点の尾張産須恵器を集成した。

考察では、流通の背景について幾つかの見解を示した。平城宮においては、儀式書のひとつで平成27年度 *文学研究科文化財史料学専攻

ある『儀式』や『延喜式』神祇・宮内省の踐祚大嘗祭関係の記載の中に須恵器の調達についての規定が含まれている。その中の「供進雑器」という項目に、尾張を含む各国あてに、太政官符を出し、官人を派遣して徴発をするという記載がある。祭儀用という特殊な用途ではあるが、一つの流通方法として提示をした(古尾谷2012)。また、S D 3715出土の尾張産須恵器については、別見解を示した。木簡や墨書土器「内大炊秋人」等から、出土した多量の供膳具は、炊事との関連を検討し、食器として使用されたものとして考察を行った。宮内で多量の食器が必要となった需要に応じたのが尾張国もしくは猿投窯・尾北窯であった可能性が高いと推測した。また、焼膨れがあるものも運ばれていることから、品質よりも量に重きをおいていたのであろう。多少粗雑なものが運ばれてきても問題はない供給先であったことが推測できる。

平城京については、複数の流通パターンを考えなければならない。生産地で出土した刻書土器と同じものが石神遺跡で出土し、7世紀後半には須恵器の調納が行われていたことを示す資料として提示した。平城京でも同様に須恵器の調による貢納は行われていたものと考えられる。さらに、正倉院文書の天平六年尾張国正税帳から考察を行った。記載内容から須恵器の正税交易が行われていたことを論じた。また、同様の史料から税品目を入れる容器としても使用していた可能性を指摘した。

寺院については、僧侶が持参する仏具として運ばれてきたことを考察した。出土した多くの器種が水瓶や浄瓶、壺であり寺院という特殊空間ゆえの傾向であることがわかった。

以上をまとめると、流通方法は複数あることを提示できた。また、上記に論じた流通方法の他にいくつかの可能性を得たことも大きな成果であった。

さらに、出土器種の傾向として壺類やミニチュア土器が多数出土している。また、時期は平城宮Ⅴ以降に尾張産須恵器は出土事例が増えることが判明した。こうした傾向が起きる背景の考察については今後の課題としたい。

註) NNとは、鳴海地区鳴海支群の略称である。

《修士論文要旨》

古墳の城郭利用について

河 村 萬 里*

1. はじめに

ある時代に建造された施設が、その機能を停止した後に数世代の時代を経て再び利用されるということは、時代、地域、文化を問わず、様々な遺跡において見られる。これらの遺跡群は複合遺跡と呼ばれたり、包含地とされたりすることが多い。これらの複数の性質を包括した研究は、その多様性からか、あまり多くは行われてはいない。複合遺跡の研究の一端として本研究は古墳という施設に対して、それを再利用する形で建造された中世城郭について取り扱い、検討を試みる。

古墳と城郭はどちらも、施設機能、利用された時代、建造された当時の社会体制など多くの点で異なっており、単純な比較検討ということはほぼ困難である。しかし互いの施設は共に、その建造された時代を象徴する遺跡であり、政治的記念物としての効果を発揮していたという注目すべき共通項もまた存在する。互いに当時の時代や社会を象徴する施設が重複し、その上で機能を発揮していたという事実には興味深いものがあると考え。本研究は古墳を利用する形で存在する城郭遺構について、具体的な利用例を言及し、そのありかたを追及していくものである。

2. 研究目的と対象

本研究においては、古墳の城郭の二つの側面を持つ遺跡を取り扱う。そのためには双方の遺跡についての一定の整理が必要である。そのため、まず古墳と城郭に対しての整理を行った。その後古墳の城郭利用に関して整理した。古墳の城郭利用に対して、行われた初めての報告は、中村博司によるものである（中村1980）。この中で中村は積極的利用と破壊的利用の二つの分類を考案した。また、その中でも積極的利用に関して考えを述べた。

本論においても積極的利用を行っている類例を研究の対象とした。

3. 研究史と課題

過去の研究史を総括し、その上で課題を四つの課題を提示した。一つは、積極的利用にのみ研究が終始していること。二つ目に、前方後円墳の類例に関してのみ取り扱ってきたこと。三つ目に、研究地域が畿内に集中しており、全国の分布や地域差に関してあまり言及されていなかったこと。最後に、考古学的な型式分類や編年が行われてこなかったことである。

4. 古墳の城郭利用と分布について

本論は城郭の利用例について、四種類に区分を行った。古墳そのものを丘陵とみなし、墳丘上に築城を行うA類。古墳も城郭内の一施設とみなし、工作を行ったB類。古墳そのものに手を加えていないが、古墳と城郭が隣接しているC類。築城による影響で、古墳が城郭内部に埋没したD類。この四種類である。

この上で、個々の分類に関して細分化を行った。

分布に関しては、研究対象となる類例を全国各地から集成し、分布図を製作した。また各地域事の一覧を製作し、地域差について考察を行った。これにより、丹後から但馬にかけて類例の集みがみられた。

5. 考察

これまで得られた情報を元に考察を行った。主に前述した四種類の分類について、一つ一つ情報を整理し、特徴や具体例を述べた。次に編年と型式分類に関して、幾つかの考察を述べた。

まとめとして、各利用例の総括を行い、さらに古墳への築城による影響を述べた。また陣城と居城における特徴についても考えを述べ、築城理由についても述べた。

6. おわりに

本論は二つの側面を持つ遺跡について研究をおこなった。その上で古墳のみならず、遺跡や遺構、遺物を扱う際には、その当時の状況ことに関してのみ追求がなされる。しかし、実際は、現代に至るまでに多くの過程を経て、その姿を現わしている。その過程を少しでも明らかにする研究が、躍動しても良いのではなかろうかと筆者は考え、本論の執筆をおこなった。本論の成果がまた新たな研究の呼び水にでもなれたなら息災である。

《修士論文要旨》

甲斐における中世集落の様相

高左右 裕*

考古学において中世集落研究は1980年代に入ってようやく本格化するといえ（齋藤1983）、集落研究の中で考古学は文献史学の膨大な研究成果をどのように乗り越えていくかが問題であるとされる（広瀬1988）。私はその中で遺跡の報告があまりなされていないと思われる甲斐において考察する。考古学において中世集落の研究は近畿が先進し（広瀬1988、佐久間1994、前川1997）、その他地域の研究成果は極めて乏しい。それは近畿以外の地域では土器の出土件数が激減してしまうことやそれに伴う遺跡自体の見逃しがあるからだと思われる（坂井2003）。そこでこの状況を打破する意味も込めて、甲斐を研究対象としようと思いついた。

まず土師質皿編年から中世遺跡の発見とその時期決定を行っていく。編年は第1類から第4類に大別、その中でもa型式とb型式、中にはc型式まで細別できた。これに年代観を付与したところ、一期の12世紀後半から13世紀で、第2類のように底部から口縁部にかけて端を折ってつまみ上げて形作る物が見られ、これが一期の主流であることがうかがえる。この時期は器種の再編がなされてくる様子がうかがえる。次の二期は14世紀から15世紀初頭で、この時期では第1類のように緩やかに内湾してくる型式が現れ始め、口唇部の肥大化が見られるようになる。この時期から器形に変化を持たせるような調整は徐々に減り、次の三期に見られるように技術が簡略化かつ定形化されていくことになる。その三期は15世紀から16世紀初頭で、ロクロにより手間を省くような技術の簡略化の様相をみせる。四期の16世紀に入ると、16世紀前半ごろに一番シンプルな1c型式が登場し、口縁端部がまた尖るような印象を持ち始める。ここにさらなる技術の簡略化が推し進められる様子をうかがえる。

I期は竪穴住居を主として細かく集落が展開していた様子がうかがえる。その集落構造は屋敷地が不規則に展開しており、墓域とも雑多に混じり合って存在している。それがII期になると前半ごろに大きく集落の展開場所が変わる。それに合わせて集落が溝を回らし、範囲を明確化しようとするような様子を見せ、墓域も分離されるようになる。そしてIII期には集落数が激減し、甲州街道など大きな街道沿いに集まる様子を見せる。それらは短冊形地形の様子を見せ、計画的に集落が展開するようになる。ここで先行研究と合わせると、徐々に畿内において出現した中世集落の型式を東国の集落が追うような形で変化していると言える。そして15世紀後半には日本の集落はある程度同じ段階にあったのではなかろうかと考えられる。

一期である12世紀から13世紀では竪穴住居が不規則に存在する古代の様相が続いており、明確に中世へと変化するの二期の14世紀ごろであると言える。それは鎌倉幕府の下で機能していた荘園制が、室町時代にその機能が限界になったことで、甲斐国内では荘園制からの大きな転換が平成27年度 *文学研究科文化財史料学専攻

起こなわれたことによるものと思われる。それに伴い、集落構造は区画溝を回らすようになり、屋敷地と墓域を分別するようになるといった計画的な集落を作るようになる。それと同時に武田家が守護として在地に対し力を持ち始めたことが、集落の分布から推察される。そしてそれ以来在地勢力の武田氏が徐々に力を付け始めたことにより15世紀末以降、本格的に在地領主として統制を行ったことで、その計画的な支配を受けてその統制的なニーズに合った都市や集落形態の変化が現れたのだろう。その現象が堺などの都市で見られる「草戸型」と同様に直線的な方形の区画溝を回らした計画的な集落形態なのではないかと考える。

しかし、課題も多く残された。まず一つに土器の器種を皿に限定して行っているため、他の器種との平行関係も必要である。また形からの視点だけではなく、法量や調整などからの視点からのアプローチを行うことで、一つの時期をさらに細分化することも十分可能である。その後、地域流通を考えることで集落に生活する人々の動向や集落居住者の種別に対しても分析が行えるだろう。個人の職種などの個人的な属性まで範囲を広げることで、一つ一つの遺跡を詳細かつ多角的に見つめることができ、さらに細かな集落ごとの分析ができるだろう。そして他地域の集落研究を行い深化させることも重要である。これにより中世集落のさらには社会や文化が明らかになるだろう。今回の分析から得た結果により畿内から地方への影響が見られるのではないかと考えたが、それを明らかにするためにも一国だけの視点ではなく、三国以上の地方という視点で分析を行わなければならないだろう。そのためには基礎として今回のような研究の更なる拡充、そして土器の検出量が少ないことから中世建物自体の研究を進める必要もあるだろう。最後には有力者の館や城との比較や組み合わせを考証することを目指す。このように一般民衆の力だけではなく、上層階級である武家などといった在地勢力や畿内の公家の動向などを総合して分析することで集落の形を規定する者へと光を当ててゆきたい。

《修士論文要旨》

麻を用いた紅花染の退色について

—正倉院の紅花染—

田 中 沙 織*

1. はじめに

私たちが生命を維持するうえで、体温を保つための衣（衣服）、栄養を採る食（食事）、雨や風などをしのぐ住（住居）が必要である。その中の衣では、古代から毛皮、麻、絹、木綿などを使用してきた。

日本の染織品の中で第一級の歴史的染織資料である正倉院の染織品にも麻、絹などを使用した宝物が数多く納められている。また、正倉院の保存環境が良かったため、形や鮮やかな色彩を保つものが残っている反面、経年劣化によって、粉状になってしまったものや変退色したものもある。このことからどんなに保存環境が良くても経年劣化を止めることは難しいことがわかる。染織品の劣化の要因は光（紫外線）、温度、湿度、折り曲げ・摩擦などの物理的作用、大気中に含まれる酸素や虫害などが挙げられる。

本研究は、堅牢度が低い紅花染めが1250年以上を経た正倉院宝物の中から機器分析によってその存在が明らかにされたことから、経年劣化によって変退色した紅花染めがどのような環境要因の下で変退色したのかの検証を行うものである。

2. 実験

劣化促進（変退色）の実験を行う為に試料作成を行った。試料の布は麻（苧麻）とし、染色には市販の乾燥花卉を用いた。乾燥花卉を水切りネットに入れ、浄水で揉み洗いを3日間行い、黄色色素を可能な限り除去した。揉み洗った花卉をpH11に調整した水温10度以下の炭酸カリウム水溶液に1時間半浸し、ときどき揉みながら赤色色素を抽出した。抽出した液にクエン酸を加えて、pH5に調整し、麻布を1時間半浸し染めした。この工程を10回行い重ね染めした。炭酸カリウム、クエン酸は、古来使われてきた灰汁、烏梅の代用品として用いた。

試料作成後は劣化促進実験のため、日光曝露、紫外線照射と高温多湿実験を行った。高温多湿実験では、宝物が唐櫃に収められていたことから、唐櫃と同じ素材のスギ箱に入れた試料と入れていない試料の比較実験を行った。劣化促進実験後は色彩色差計で色差を測定し、数値をグラフ化して、色彩の変化を読み取った。

3. 結果

未染色試料（ブランク）は日光曝露ではっきりと白へと漂白され、紫外線照射ではクリーム色

平成27年度 *文学研究科文化財史料学専攻

へと変色しているが日光曝露の試料と比べて、はっきりと判別できなかった。紅花染め試料は日光曝露、紫外線照射ともに変退色していることをはっきり見ることができた。高温多湿実験ではスギ箱に入れたものと入れてないものでは、肉眼観察では色の鮮やかさが失われたぐらいではっきりとした差を見ることができなかったが色彩色差計による測定では数値に違いが出ており、高温多湿の劣悪環境でも箱に入れたほうが劣化が緩和されることがわかった。

4. 考察

紅花染めの劣化促進実験から、紫外線照射、日光曝露、高温多湿、それぞれに変退色度の違いが測定された。この結果、正倉院に収められている紅花染めの染色品は、宝物として収められる前に退色したと考えられるものが数点あり、正倉に納められて以降は、変退色の進行速度は落ちたものの、温湿度変化の影響によって、変退色が緩やかに進んでいたと考えられる。

5. まとめ

文化財の劣化はたくさんある要因が複合的に重なることで促進するので要因を一つでも多く取り除くことはもちろん、文化財の形状や色彩などのデータを集積し保存していく必要がある。なぜなら、文化財の劣化を完全に止めることはできず少しずつ破損や変退色を起こすので、現在、どのような形状でいて、どんな色をしているのかを後世に伝えるために必要だからである。形状や色彩がわかっているならば復元展示し本物がどんなものであるかを多くの人たちに見てもらい、知ってもらえることができるからである。

本研究の結果から、正倉院の紅花染めは使用時または献納後に劣化が進んでおり、たとえ鮮やかな色を残していても染められた当時の色ではない事がわかる。染色は染める人、染める時間などの染色技術や、温湿度などの保管環境で色が変わるので、製作当時の色を完璧に復元することはできない。

しかし、どのような色をしていたか知る事はできる。本研究は、紅花染めがどのぐらいでどの程度変色してしまうのかを知る材料の一つでしかないが、さまざまな染色条件、劣化条件で実験を行い、多くのデータを集める事で当時の色がどのような色だったのかを推測することが出来ると考えてる。

《修士論文要旨》

原始・古代の舟形木製品の研究

堤 千 畝*

舟は現在でも水上における移動手段として必要不可欠なものである。船舶資料の中には、非実用的なものも存在する。それは、舟形埴輪や絵画資料などがあげられる。その中で船を模した木製品は原始の時代から作られ、祭祀に用いられたと考えられている。

本稿では、まず全国の舟形木製品を集成し、分類を行い、舟形木製品の各時期の出土遺跡数と分類状況の変化、出土遺構、共伴する祭祀関連遺物等を分析する。加えてその変化の背景を考察することを目的とし、舟形木製品の本質に触れていきたい。

舟形木製品の基礎的研究として、久保寿一郎氏の研究がある。

久保氏は舟形木製品を集成し弥生時代から近世における舟形木製品を形代としての表現方法から立体舟形A類と板状舟形B類と分類し、更に

- A1. 内部を削り抜いたもの
- A2. 欠き込み、削り、溝により内部を表現するもの
- A3. 内部を加工していないもの
- B1. 平面観を呈するもの
- B2. 側面観を呈するもの

の5種類に細分化した。

しかし久保氏の基礎的研究の後も、開発を伴う発掘調査が増加し、それに伴い舟形も製品の出土も増加した。また久保氏の研究の後、各時代や地域を絞った研究は行われているが、あまり研究が行われていないのが現状である。

そこで本稿では、まず全国の舟形木製品を集成し、分類を行い、舟形木製品の各時期の出土遺跡数と分類状況の変化、出土遺構、共伴する祭祀関連遺物等を分析する。加えてその変化の背景を考察することを目的とし、舟形木製品の本質に触れていきたい。

また今回研究するにあたって、弥生時代と古墳時代は各前期・中期・後期に区分した。しかし弥生時代後期から古墳時代前期にあたって時期幅のある舟形木製品もあるため、その時期に位置している舟形木製品は、別の項目として述べている。また分類方法は以下のとおりである。

a型 深く削り抜いているもの。

b型 浅く削りぬいているもの。また舳艫の主軸方向に対して平行に溝や、抉りをいれているもの。

c型 削り抜いていないもの。

平成27年度 *文学研究科文化財史料学専攻

d型 刳り抜かず、板状にせず、舳艫の主軸方向に対して直角に段や溝を入れたもの。

ここでは舟形木製品の各変化について述べていく。

出土遺跡数は、弥生時代後期から古墳時代前期にかけてと弥生時代中期と比較して2倍以上増加している。また出土遺構においては、包含層や自然流路、溝だけではなく弥生後期からは、土壙から出土が確認されるようになった。分類状況に置いておいても、a型が圧倒多数だが、古墳時代前期でa型～d型が確認されるようになる。以上のことから弥生時代後期から古墳時代前期にかけて何かしらの変化があったと考えられる。

出土数において、古墳時代後期、特に7c代になると、1つの遺跡に数十点出土するようになる。奈良時代・平安時代になっても、その兆候は続く。また伴件している祭祀関連遺物では、古墳時代後期から馬形木製品、斎串、人形木製品のセット関係が目立つようになる。そして分布状況においては、古墳時代後期以降になると、a型がほぼ80%を占めていたのが、d型やb型の割合が多く占めるようになる。これらのことから、古墳時代後期特に7c代に何らかの変化があったのではないかと考える。

以上のことから舟形木製品の画期は以下のようになるのではないかと考える。

第1期 弥生時代中期以前

第2期 弥生時代後期から古墳時代後期（7c代）まで

第3期 古墳時代後期（7c代）以降

現段階の集成において、小山崎遺跡（山形県）では縄文時代の晩期の包含層から、形態としては特殊なものであるが舟形木製品が出土している。また丸木舟は縄文時代前期からその存在が確認されているように、舟形木製品が出土してもおかしくはないことから、このように弥生時代中期以前を第1期とした。

第2期の弥生時代後期から、舳艫部分に溝や段になっている舟形木製品の出土が確認されている。これらはよく準構造船を模した舟形木製品であるといわれている。おそらくではあるが、準構造船の出現がこの時期の舟形木製品の画期の変化の一つの要因ではないかと考えられる。

第3期の古墳時代後期からでは、1つの遺跡で数10点以上出土している遺跡は、何かしらの官衙遺跡に関連する遺跡が多い。また祭祀関連遺物のセット関係が馬形木製品、人形木製品、斎串もしくは鳥形木製品、人形木製品、斎串になっており、地方であっても、京であっても共通の祭祀がされていた可能性が高いと考えられる。

最後に、これまでに舟形木製品のことを述べてきたが、今回の資料集成にあたって、すべての出土した舟形木製品を集成できたとはいえない。墨書等の付加要素の検討、舟形木棺や他の舟形模造品の相関性、地域差を検討することまで至らなかった。舟形木製品の資料集成や整理を継続していくことで、舟形木製品の本質や意義を解明していきたいと思う。

《修士論文要旨》

近世文化財の保管環境に関する調査と考察

仁 木 理*

第1章 はじめに

文化財には多くの種類と量があり、製作時期も様々である。本稿ではその中でも近世の文化財を後世にどのように残していくかを考える。近世資料は約450年前から以降の文化財のことをいう。特に江戸時代に作られたものが多い。近世資料は制作されたのが比較的時代が新しいため現存する文化財がとても多い。古代～中世に関する現存資料は少なく、発掘による埋蔵文化財が大半を占めている。それに比べて近世資料は美術品、文献資料、工芸品などが多く残る。こうした資料は文化財を扱う博物館や資料館だけでなく、個人が所有するものも多い。テレビ番組で幕末武士の子孫がゆかりの品を受け継いでいるというのを見たことがあるのではないだろうか。近世資料は各地に多く存在し、江戸周辺だけでなく日本の地方の歴史を明らかにするのにとても重要である。

しかしながら資料は豊富に存在するが、その分失われる資料も多いことが問題点として挙げられる。また個人所有の資料は保存状態もよく分からないことが多くある。近世資料を劣化させることなく後世に伝え残していくことを目標に環境調査を中心に研究を行った。

第2章 文化財と温湿度の関係

文化財を保管していく上で永久に関わり続けるのが温湿度環境である。温湿度が一定に保たれた環境で保管することが望ましい。しかしながら材質によって適した温湿度の数値が異なる。文化財がどういった材質でできているのかを調べ、それに適した温湿度で保管することが良い状態で、より永く残すために重要である。

第3章 調査対象の近世資料

調査対象としたのは筆者の父が所有する漆器・食膳とこれらが保管されてきた木製の箱である。これらは約400年前から始まる仁木家の当主に受け継がれてきた文化財の一つである。木箱の記述から1781年頃のものだと判断できる。徳島藩の家老であった池田氏との関係や近世の暮らしを知る重要な資料である。

漆器は比較的高い湿度の環境で保管することが望ましい。しかしながら劣化の度合いによっては、さらなる劣化が進む恐れがあるため漆器の状態を観察することが大切である。なおこれら資料は現在10階建てマンションの床下収納庫に収められている。現今ではこうした収納庫が多く見られ、今後も増加するものと推測している。

平成27年度 *文学研究科文化財史料学専攻

第4章 調査概要

主に温湿度環境を中心に調査を行った。データロガーを使用し木箱内と木箱が収納されている床下スペースの日々の温湿度変動や長期的な変動を調査する。

また木箱は壊れる可能性や手に入りにくいという問題もある。木箱以外に適した収納箱がないか、代用品として段ボール箱とプラスチックケースを取り上げて温湿度調査を行った。

さらに漆器の表面観察調査も行った。写真による記録と目視による観察を行い、現在の劣化の現状を確認し将来の劣化の進行度合いを定量するための比較データとして使えるようにした。

第5章 漆器の表面観察劣化調査結果

表面観察を行った結果ほとんどの漆器で目立った劣化は確認されなかった。しかし、数点の漆器には、漆塗膜の剥離や、漆器のキズ・割れが見つかった。今後、劣化箇所からさらなる劣化の進行がないか定期的かつ継続的な観察が必要であるという結論に至った。

第6章 温湿度計測調査結果

主として①木箱内外データ②外気データと床下・木箱内③正倉院データと床下・木箱内④代用品（プラスチックと段ボール箱）と床下・木箱の4項目で表・グラフを作成し比較と考察を行った。①と②は1ヶ月ごとにデータを分けて比較を行った。

温度に関しては床下・木箱内の両者間に温度差はあまりなく、木箱に調湿効果はほとんどないとの結果が得られた。

湿度に関しては、床下は外気の影響を床下は受けているとの結果が得られた。木箱内も外気の影響を受けているものの変動を最小限に抑えることができていた。また、床下よりも木箱内湿度の方が高く、変動も2分の1に抑えていたことから木箱に調湿効果があることが立証できた。しかしながら、正倉院の唐櫃と比べるとその効果は劣っており、自然の力の限界が見えた。代用品として調査したプラスチックケース、段ボール箱はともに調湿効果はほとんど見られず、木箱の有能性が実証される結果となった。今後保管していく上で、湿度の低下を防止すること及び一定に保つことが課題となった。

第7章 近世文化財を残していくために

筆者は学部生・大学院生の6年間個人所有の近世文化財を取り上げて温湿度調査等を行ってきた。個人の力で温湿度を一定に保って保管することは難しい。また、現代社会において、家族の考え方、家の考え方も大きく変化してきた。文化財にとっての周辺環境も変化し、気付かない間に劣化してしまうことも考えられる。

膨大な量の文化財を個人一人ひとりがただ所有するのではなく、興味を持ち調査して大切に保管していくことでより多くの近世文化財を後世に残していくことができる。本論文を通して個人所有の文化財に目が向けられるようになれば幸いである。

《修士論文要旨》

紺紙金字経の材質分析

—金字の科学分析及び真鍮泥と金字経の製作—

西 来 友 花*

はじめに

仏教経典は、漢字圏では一般に白紙の料紙に墨字で記されるものであるが、中にはしばしば紫紙や紺紙など様々な色に染められた料紙の上に金泥、すなわち金粉を膠で溶いた顔料で経文を書写した例が見受けられる。その中に属する紺紙金字経は、藍で紺色に濃く染めた和紙を写経用の料紙として使用し、多くは金泥で経文を写経することが一般的である。このような装飾の意図は、浄土を構成する七宝の内の金銀瑠璃の3種を表すものとして、紺紙は瑠璃を地とした仏国土を、仏教において極楽浄土の荘厳さを表現する七宝である金や銀で書写し、仏の教えを飾ろうという心の現れであるというのが通説である。

しかし、西山要一と東野治之の「東アジアの真鍮と紺紙金字古写経の科学分析」(『文化財学報33号』)では、金泥の材料として真鍮の使用例が報告されている。この分析では、様々な時代の古写経の断簡が蛍光X線分析によって調査されたが、紺紙金字経製作の際に膨大な経典全てに真鍮が使われたのか、金泥と混合していたのか、実際の所どのような金属を使用した金泥で書き記しているのかは、まだ分析例が少なく不明な部分が多いのが現状である。

本研究では、紺紙金字経断簡7点の金字と界線部分の成分分析を行った。また、金泥・真鍮泥内の鍍粉の状態を観察し、真鍮泥2種類と金泥の計3種類を使用して真鍮泥写経の作製を行った。

1. 紺紙金泥経の材質に関する科学調査(金泥部分)

紺紙金字経断簡の金属泥の解明を目的として、エネルギー分散型蛍光X線分析装置を使用し、7点の資料断簡の成分分析を行った。

<分析資料(断簡)>

A 美福門院得子發願一切経(荒川経)	平安後期
B 妙法蓮華経	平安時代
C 妙法蓮華経	平安時代
D 妙法蓮華経	鎌倉時代
E 裝飾法華経	室町時代
F 高麗経	高麗時代
G 仏説無量寿経	江戸時代

平成27年度 *文学研究科文化財史料学専攻

<考察>

A・C・Eの3点は、金字から銅と亜鉛が検出され、真鍮泥であることが分かった。特にEは、界線部分も含めて銅と亜鉛が検出されている。合金比は、全体的に銅の比率が多く亜鉛が少ない「丹銅」に近く、赤みが強い真鍮である。しかし、どの断筒も目視でその赤みの差を確認することは困難であった。

B・D・F・Gの断筒は、金字は金、界線は銀が検出された。日本で制作されたB・D・Gは金字と界線のどちらかが金銀混合泥であるのに対し、高麗で制作されたFは金字が純金、界線は純銀であった。今回の分析では、日本製経典に純度100%の金属泥のみの経典断筒はなく、合金泥または金銀混合泥が使用されていた。

2. 真鍮泥の作製と技法研究

真鍮泥を使用しているA・C・Eの中から「A美福門院得子發願一切経（荒川経）」断筒の複製を作製し、（1）金泥と真鍮泥は作製工程での差異は見られるのか、（2）複製断筒の真鍮泥と金泥の状態の観察及び資料断筒と複製断筒の比較の2つの観点から考察を行った。

作製実験では色味の違う真鍮泥（赤金）、真鍮泥（青金）の2種類と、金泥の3種類の断筒を作製した。

<真鍮泥断筒作製工程>

①鑪による真鍮粉の製作 ②膠液作り ③真鍮泥溶き ④写経 ⑤螢生（研磨）

<資料断筒の金泥・真鍮泥の観察>

真鍮泥を作製する前に、各資料断筒の泥内の金粉と真鍮粉が、どのような状態で断筒の紙面上に存在しているのかを観察するために、デジタルマイクロスコープを使用して観察を行った。

<考察>

（1）金泥と真鍮泥は作製工程での差異は見られるのか

真鍮泥を膠で溶く工程までは金泥と同じように扱うことができたが、書写後の螢生では、金泥のような光沢を真鍮泥では出すことは難しく、真鍮泥は螢生の前後で変化はなく、研磨の効果が特徴的に現れることはなかった。しかし、真鍮粉が磨かれずに紙面上にのっているだけでは剥離しやすいため、螢生作業は剥離防止のためにも必要な作業であるといえる。

（2）複製断筒の真鍮泥と金泥の状態の観察及び資料断筒と複製断筒の比較

書写した2種類の真鍮泥断筒は、銅の比率が高い赤よりの金色（赤金）と銅の比率の低い青よりの金色（青金）の色の違いが確認できた。また、2種類の真鍮泥は、金泥との色の差異も確認できた。真鍮泥は螢生を行っても金泥のような光沢が出なかった。真鍮泥（赤金）は鈍い光沢を持ち、光沢の落ち着きは金泥に近く、真鍮泥（青金）は黄みが強く、明るさは金泥に近く見えた。

また、3つの複製断筒を資料断筒と比較した結果、真鍮泥（青金）で製作したものが資料に近

い色合いだった。

おわりに

本研究では、紺紙金字経断簡7点の蛍光X線分析を行った結果、内3点から真鍮泥使用を確認することができた。また、金属泥内の鍮粉の状態観察や真鍮泥写経の作製の技法調査では、金泥と真鍮泥の両方の使用を実験することで、個々の金属泥の違いに関する情報を得ることができた。

今後、より多くの紺紙金字経資料の分析や多方面からの調査研究によって、使用材料の産地や紺紙金字経作製の技法を解明するとともに、その特徴を明らかにすることを目指したい。

《修士論文要旨》

和歌山県岩橋千塚古墳群出土の ガラス小玉分析についての研究

長谷川 愛*

1. 研究の目的

本論文では、和歌山県岩橋千塚古墳群出土のガラス小玉の科学的分析を行い、製作技法や基礎ガラスの種類を検討して、和歌山県岩橋千塚古墳群のガラス小玉の分布を明らかにし、紀ノ川流域でのガラス小玉について考察することを目的とする。

2. 分析資料

分析を行ったガラス小玉出土の遺跡と資料数は以下のとおりである。

- ・岩橋前山A58号墳（5世紀第4四半期頃）…35点
- ・井辺前山6号墳（6世紀第1四半期頃）…ガラス小玉106点、トンボ玉9点、勾玉4点、
管玉9点
- ・大日山35号墳（6世紀第2四半期頃）…32点
- ・將軍塚古墳〔岩橋前山B53号墳〕（6世紀第3四半期頃）…3点
- ・岩橋前山A13号墳（6世紀第3～4四半期頃）…25点

3. 出土遺跡ごとのガラス小玉の製作技法

製作技法を推定するために、顕微鏡観察とX線透過撮影を行った。ガラス小玉の気泡の配列の状況や小口面および側面の様相を観察した。

その結果、岩橋前山A58号墳のガラス小玉は引伸ばし法30点、・鋳型法5点、井辺前山6号墳のガラス小玉は引伸ばし法106点、大日山35号墳のガラス小玉は引伸ばし法32点、將軍塚古墳のガラス小玉は引伸ばし法3点、岩橋前山A13号墳のガラス小玉は引伸ばし法25点であった。

5世紀後半の古墳にのみ鋳型法で製作されたガラス小玉があり、6世紀初め以降の古墳からは引伸ばし法で製作したガラス小玉しか存在していないことが分かった。

4. 成分分析による基礎ガラスの分類

ガラス小玉の化学組成を知るために、蛍光X線分析を行った。分析資料の表面は風化しているが、文化財分析においては非破壊分析が基本理念であるため風化層を取り除かないで分析を行った。

分析を行った結果、カリガラスが1点、ソーダ石灰ガラスが35点、低アルミナ石灰ガラスが116
平成27年度 *文学研究科文化財史料学専攻

点、高アルミナソーダ石灰ガラスが44点、鋳型法で製作されて二次的に製作されたと考えられるガラス小玉が5点であった。

5. 考察

観察と分析の結果、5世紀後半には、奈良県や大阪府でガラス小玉の鋳型が出土している。岩橋前山A58号墳で鋳型法で製作されたガラス小玉が出土していることから、このころには国内で製作（二次制作）したガラス小玉が流通していたと考えられる。また、ガラス小玉のサイズは紺色も淡青色も6mm以下と比較的小さめであり、大阪の風吹山古墳出土のガラス小玉も6mm以下のものが多いことから、5世紀には小さいガラス小玉が多く流通していたと考えられる。

また、3世紀ごろにはカリガラスは日本列島全域に流通し6世紀末ごろにその流通が途絶えたとされているが、6世紀初めの井辺前山6号墳でわずか1点しか確認できていないことから、岩橋千塚ではカリガラスではなく、低アルミナソーダ石灰ガラスが主流であったと考えられる。

6世紀になると、全国的にガラス小玉の流通は全盛期になる。岩橋千塚でも井辺前山6号墳では約100点の多量のガラス小玉が出土している。

また、トンボ玉の流通が多くなるのもこの時期で、井辺前山6号墳でのみ9点出土している。トンボ玉の全国的な分布を俯瞰すると、大和政権を中心とした畿内周辺に比較的多く、墳丘規模や共伴する副葬品の構成が優位な古墳からまとも出土する傾向が認められている。井辺前山6号墳は紀ノ川流域では優位な人物の古墳であった可能性がある。

6世紀後半になるとガラス小玉は岩橋千塚古墳群のように高アルミナソーダ石灰ガラスが主流になる傾向がある。特に岩橋前山A13号墳のガラス小玉は色調が淡青色、黄緑色、黄色の単色で大きさも6mm以下、引伸ばし法で製作されていることから、インド・パシフィックビーズ系と考えられる。インド・パシフィックビーズは日本では6世紀後半に流通が増えてくることから、この流れで岩橋前山A13号墳にも副葬したのである。

上記の結果から、岩橋千塚古墳群で出土するガラス小玉は、西アジア～南アジア・東南アジアで製作された「アジアのガラス」である可能性が高いと考えられる。

紀伊は朝鮮半島からの影響を多く受けている地域である。百済系や新羅系の陶質土器やソロバン玉形の紡錘車出土していることから、朝鮮半島と交易していたことがうかがえる。また、井辺前山6号墳からも朝鮮半島から伝来した赤く焼成された陶質土器の甕片が多数出土している。こうした状況から、ガラス小玉も朝鮮半島とのさまざまな交易品と共に渡ってきたのではないだろうか。

6. まとめ

岩橋千塚古墳群出土ガラス小玉の製作技法・基礎ガラス・色調の対応関係を6種類に分けることができた。その中でも引伸ばし法で製作された低アルミナソーダ石灰ガラスが多いことがわかった。

基礎ガラスの種類と時期の組み合わせを考察した結果、従来研究で明らかとなっているガラスの流通の様相と類似していることがわかった。

現在、本研究以外に和歌山県出土のガラス小玉の分析データは皆無であったため、和歌山県全体のガラス小玉の出土状況が把握できない。和歌山県には未分析のガラス小玉が多量にある。今後、これらの科学分析が進み、より正確な岩橋千塚古墳群をはじめ、和歌山県のガラス小玉の分布と変容について明らかにしたい。

《修士論文要旨》

中近世大和における土器陶磁器の様相

三宅和子*

これまでの大和における中世土器は、森下氏・立石氏により定義された様式的変遷^(注1)のもと、在地土器を中心に進められてきた。しかし、両氏の発表からおよそ四半世紀が経過しており、その後新たに検出された資料も数多い。また、当該期の出土遺物様相の主体はその年代が新しくなるにつれて国産陶磁器が占める点は周知の事実である。そのため在地土器の研究の進展に伴い、国産陶磁器の様相を含めた総括的なモノの様相を捉える作業が求められると考える。

よって本稿では、奈良盆地北部の奈良町遺跡と、中南部地域に点在する城館跡資料を対象とし再度年代観の整理、総括的な検討を試みることとする。

分析の際、ある程度まとまった様相を示すものを対象とし、主に近世に焦点をあてるが、中世から近世への遺物様相の変化、特に唐津、伊万里出現期の様相について検討するため、中近世移行期からの検討を試みた。そのため、概ね16世紀中頃から18世紀代までを対象年代とした。在地土器、搬入陶磁器を含めた、各器種の組合せ関係により画期を定めることとする。

分析の結果、肥前陶器、肥前磁器、炮烙、堺産播鉢の出現をもって17世紀初頭から18世紀までをそれぞれ以下のⅠからⅣ期の4段階に区分した。

Ⅰ期：肥前陶器出現による、国産陶磁器主体様相への準備段階

Ⅱ期：伊万里産磁器碗・皿の出現による国産陶磁器を主体とした食膳形態の転換

Ⅲ期：土師質土釜から炮烙への煮炊形態の転換

Ⅳ期：信楽、堺産播鉢を主体とした加工形態製品の転換

森下氏・立石氏らは上述のⅠ期を「普遍的な陶器碗の使用がみられ、陶器を主体とした近世的な土器様式が確立されていく」段階、Ⅱ～Ⅲ期を「伊万里磁器出現以後の近世的な汎全国的商品流通にもとづいた国産陶磁器を主体とする画一化された土器構成をもつ」段階としており、分析の結果、後者は遺物の用途形態によって更に3段階に細分されることがわかった。このことは、在地土器を主体とした中世的な土器様式から、国産陶磁器を主体とした近世的土器様式への転換が段階的に進行したことを示す。

更に、近世大和において、信楽焼製品の出土が目立ち、特に播鉢においてその出土数の変化は顕著であることから、当該期出土の信楽焼播鉢を以下のように分類した。

A-1類：口縁端部が外反し、色調は灰白色、薄い橙色を呈する。摺目は4～6条/単位。

平成27年度 *文学研究科文化財史料学専攻

A-2類：口縁端部が外反し、底部から口縁にかけて直線的にのびる。色調は橙色を呈し、見込みに摺目を格子状に施す。

B類：口縁端部をくの字にまげ、見込みに格子状の摺目を施す。表面は赤褐色を呈する。

C類：口縁端部が二股にわかれ、摺目は密に施される。また見込みに格子状の摺目を施す。

D-1類：端部を丸くおさめ、口縁外面に凸帯を2条めぐらす。全体に鉄泥を施し、見込みに格子状の摺目を施す。

D-2類：D-1類のものより端部が立ち上がり、底部に高台がつく。器形がやや小振りである。表面に泥漿を施す。

E類：口縁端部を大きく外反させ、内面から高台内面に向け鉄泥を施す。また、摺目は密にほどこされ見込みに放射状に摺目を施す。底部に高台が付く。

先述の画期におけるそれらの変遷を検討し、その結果、口縁端部が外反する信楽焼播鉢生産開始以来の形態が、Ⅱ期以降その様相を一変させ、Ⅲ期において最も口縁端部の形態が多様化する点が指摘される。近年生産窯の様相が明らかにされる段階であることから、消費地大和と生産地、二つの地域を捉えたモノの流通へのアプローチが求められるが、本稿にて大和の分布状況や生産地資料との比較検討、また具体的な流通背景に言及するまでに至らなかった点は、今後の課題としたい。

以上、修士論文では、大和における土器陶磁器の様相について、近世を主体とし、それらの総括的変遷を検討することに加え、更に当該期出土信楽焼播鉢の様相を、共伴する土器陶磁器から捉えることを試みた。土器陶磁器の様相は各器種の出土数についての検討はしておらず、今後の課題と言える。また、信楽焼播鉢は先述のように生産地と、消費地大和間のモノの流通や、その社会的背景への追及が今後求められる。また、中近世における広域流通品の様相について今後の展開が望まれる。

注1) 立石堅志・森下恵介1986「大和北部における中近世土器の様相—奈良市内出土資料を中心として—」
『奈良市埋蔵文化財調査センター紀要1986』奈良市教育委員会

《修士論文要旨》

古人骨から見た縄文人と生業の研究

桃 井 飛 鳥*

1. 本論の目的

縄文人がどのように生業活動を集団内で役割分担し、行っていたかを検討した考古学的研究はほとんどない。この考古学の現状とは相反し、人類学では人骨に残る身体動作や生活習慣の痕跡を、生業と関連付けて分析を行い、一定の成果を挙げている。さらに、近年炭素窒素同位体分析を用いた食性分析の研究が目覚ましい成果をあげており、集団内における食性の個人差が検討可能となった。

以上のことから、本論では古人骨に見られる病歴や生活痕を分析し、その結果を考古学、人類学、民俗学などを用いて多角的に検討を行うことで、縄文人の生活様相や生業の集団内役割分担について考察を行うことを目的とする。

2. 分析と考察

分析対象人骨は小竹貝塚出土人骨159体（男性62個、女性28個体）と、太田貝塚出土人骨（男性20個体、女性が11個体）を使用した。小竹貝塚、太田貝塚ともに集成と資料調査を行い、太田貝塚は筆者自身が性別、死亡年齢推定、病歴等の鑑定を行った。

（1）距骨蹲踞面からみた生業活動

人は蹲踞姿勢と呼称される、お尻を地につけず、かかとをつけ屈む姿勢をとると、下肢骨の各関節部分に負荷がかかり変形する。この変形した箇所を蹲踞面と呼ぶ。本論では足首の位置の骨である、距骨の蹲踞面に焦点を当て、分析を行った。筆者は先行研究の分類を参考にし、

A型：内側関節面延長

B型：内側関節面延長＋外側関節面延長

C型：内側関節面延長＋距骨頸骨隆起

D型：内側関節面延長＋外側関節面延長＋距骨頸骨隆起の4つに分類し、各遺跡における男女差、死亡年齢差、左右差のある個体の分析などを行った。

その結果、両遺跡全ての距骨に、蹲踞面が確認できたことから、小竹貝塚と太田貝塚の人々は常習的に蹲踞姿勢をとっていたことが判明し、距骨頸に骨隆起が生じている割合が、太田貝塚出土人骨は左距骨では約40%、右距骨では約25%であり、小竹貝塚出土人骨では両距骨とも約20%と、太田貝塚出土人骨の方が高いことから、太田貝塚は小竹貝塚よりも安定した蹲踞姿勢を長時間とっていたことが考えられる。

平成27年度 *文学研究科文化財史料学専攻

また、距骨頸に骨隆起が生じている割合が、太田貝塚出土人骨の女性は左距骨で約60%、右距骨では約25%、小竹貝塚出土人骨の女性は左距骨では約40%、右距骨では約20%と、太田貝塚の方が多く割合を示し、このことから、太田貝塚の女性は小竹貝塚の女性よりも安定した蹲踞姿勢を多用していたと考えられる。

この要因として、太田貝塚では女性が植物採集や、採集した堅果類を加工する時に、安定した蹲踞姿勢を長時間とっていたのではないかと考えられる。食性分析結果から太田貝塚の男性は女性よりも海産資源に依存する傾向が強いことが判明しており、また外耳道骨種が太田貝塚の男性の25.3%に見られ、女性には見られないことから、太田貝塚では男性が潜水による漁撈活動を、女性が採集活動を主な生業としていたと考えられるためである。

一方、小竹貝塚は食性分析結果により、男女関係なくバランスよく食物を摂取している傾向を示し、外耳道骨種も男女共に認められることから、小竹貝塚は男女の生業差が少なく、男女協力して生業活動を行っており、狩猟や漁撈活動に女性も従事していたか、あるいは狩猟や漁撈後の食料の加工・調理時に、男性も参加していた可能性がある。

(2) 運搬方法についての検討

頭上運搬との関係が指摘されている、プレグマ部の骨肥厚の分析を行った結果、両遺跡で男性の約80~90%と、男性が大半を占め、同じく頭上運搬との関係が指摘されている変形性頸椎症も小竹貝塚では男性が約70%を占める結果を示したことから、小竹貝塚と太田貝塚の人々は、男性優位で頭上運搬を行っていた可能性がある。

また、右肩に負荷がかかる動作を常習していた個体が報告されていることから、小竹貝塚では、頭上運搬の他にも、肩に担ぐ運搬方法もあった可能性があり、遠方からの搬入品も多数出土しているため、運ぶ荷物の量や距離によって運搬方法を変えていたことが想定される。

(3) 骨折痕からみた生業活動

骨折痕とは、骨折後に、正常な形を保たず変形したまま、骨同士が一体化する変形治癒骨折などの、骨に残る骨折の痕跡のことをいう。小竹貝塚出土人骨の骨折痕は、直接に外力を受け骨折したとみられる個体も存在し、骨折痕が上肢骨に集中する傾向も示した。そして、男女比は男性が78%、女性が22%と、男性が約80%を占める結果を示したことから、小竹貝塚では狩猟や漁撈時に大型哺乳類の捕獲などの危険が伴う場合は男性のみ、あるいは男性優位で行われていたことが想定される。

3. 今後の課題

本論において人骨の分析から生業時の集団内役割分担がある程度検討可能であることが分かってきた。今後は、比較資料の増加と文献により生業内容が明らかになっている集団で分析を行うことで検討を深めていきたい。

《修士論文要旨》

戊辰戦争戦没者の墓石の保存

渡 邊 ゆ き の*

はじめに

石造文化財は日本全国のみならず世界中に点在しており、その種類は多種多様で、文字情報を有するものもある。石造文化財は屋外に建てられているものが多く、常に過酷な環境に曝されている。そのため急激な劣化の進行が懸念される。

これまで石造文化財の保存の研究が数多くおこなわれてきたが、全国で同時期に建立された資料を包括的に調査した事例は少ない。そこで今回、私は日本各地でほぼ同時期に建てられた戊辰戦争戦没者の墓石の調査をおこない、石造文化財の劣化の進行は地域の気象環境や石材の違いが関連しているのかについて検討した。

近年、戊辰戦争戦没者の墓石の劣化が深刻になっている。本研究では、それら墓石の現状を明らかにすることによって、未だ現状が把握されていない墓石の情報が周知される事を望みたい。

第1章 石造文化財の保存

先行研究において、石造文化財の劣化は多くの場合①物理学的劣化（凍結破壊、塩類風化など）、②化学的劣化（酸化、還元など）、③生物学的劣化（地衣類・藻類等の微生物による劣化、植物による劣化など）の3タイプの組み合わせによって引き起こされることが明らかにされてきた。戊辰戦争戦没者の墓石にみられる劣化現象も同様の要因によるものである。

第2章 戊辰戦争戦没者の墓石の保存

戊辰戦争における戦没者数は未だ正確に把握されておらず、墓所についても同様である。新政府軍の場合、墓所は戦闘と同時進行で造られ、多くは招魂社にまとめて併設された。明治6年以降にそれらの墓所のほとんどが政府の管理下におかれたが、戦後は各市町村などに管理が委ねられている。

旧幕府軍戦没者は朝敵・賊軍という汚名のもとに、新政府によって葬ることが固く禁じられていた。そのため明治元年～2年頃の戊辰戦争と同時期に建立された墓石は圧倒的に新政府軍のものも多く、旧幕府軍は膨大な戦没者数に対してほとんど墓石を確認することができないのが現状である。

いずれの場合でも現在は各墓所によって管理方法や保存状態が異なっており、定量的な劣化状態の把握が難しくなっている。

第3章 戊辰戦争戦没者の墓石の劣化調査

戊辰戦争戦没者の墓石は全国に点在しているが、調査対象の墓石は同時期に建立されたものとするため、戊辰戦争時の明治元年～2年頃に建立されたことが史料から確認できるものを対象とした。また、調査地は調査対象の墓石が5基以上あること、劣化状態の傾向が確認できることをふまえて選定した。今回取り上げる墓所は北海道函館市の函館護国神社官修墳墓、北海道江差町の檜山護国神社松之岱墓地、北海道松前町の神止山招魂社、福島県会津若松市の東明寺西軍墓地、福島県白河市の長寿院慶応戊辰殉国者墳墓、新潟県柏崎市の柏崎招魂所、新潟県小千谷市の船岡公園西軍墓地、神奈川県横浜市の久保山墓地官修墓地の8か所である。

劣化調査は目視によっておこない、竿石の4面を東面・西面・南面・北面に分けてA～Dの4段階評価で記録した。評価はAが最も劣化していない状態をあらわし、Dがもっとも劣化が進行している状態をあらわしている。基準は以下のとおりである。

- A：劣化が認められない。
- B：表面の磨滅・変質はあるが、文字の判読ができる。
- C：ひび割れ、剥離、穴などが認められる。文字の一部が判読できない。
- D：全面的に劣化が進行している、または大幅に失われた部分がある。大幅に文字が判読できない。

調査の結果、安山岩・花崗岩・凝灰岩の3種類の岩石によって劣化の傾向に差が生じることがわかったが、中でも凝灰岩製のものが最も劣化していた。それに対して、花崗岩製は劣化の進行が遅く、安山岩製は条件によって劣化状態に差がみられた。また、調査によって0℃を中心として±4℃の気温差が生じる「凍結破壊注意日」の出現回数が劣化の進行速度に影響することも確認できた。

なお、今回は墓石の4面を東西南北面に分けて劣化状態の調査をおこなったが方位による劣化状態の差はほとんどみられなかった。このことから、劣化の進行速度には日照方向等の影響は少なく、外気温の影響が大きいと考えられる。

おわりに

本研究によって、岩石の種類によって劣化の進行速度に差が生じることを確認することができた。また、凍結破壊注意日の出現回数によって劣化に影響が生じることも確認できた。石造文化財をより長く後世へ伝えていくためには用いられている岩石の種類と凍結破壊注意日の出現回数の把握をし、劣化の危険度を確認することが重要であると考えられる。

今回は明治元年から2年にかけて建立された墓石を調査対象としたが、これ以降に建立された墓石でも劣化が顕著なものが多い。今後も全国各地の墓石の劣化状態を調査し、保存対策の検討を継続していきたい。各地で近代の文化財の価値が見直されている今、戊辰戦争戦没者の墓石も劣化状態が広く周知され、より長く保存されていくことを願う。